

第17話 江戸時代の文化

仏教の不振、漢学の復興に次いで国学が勃興して、洋学もまた発達する。

国文、国史の研究からは尊王思想が生まれ、洋学者からは開国説が出る。

美術工芸の進歩。

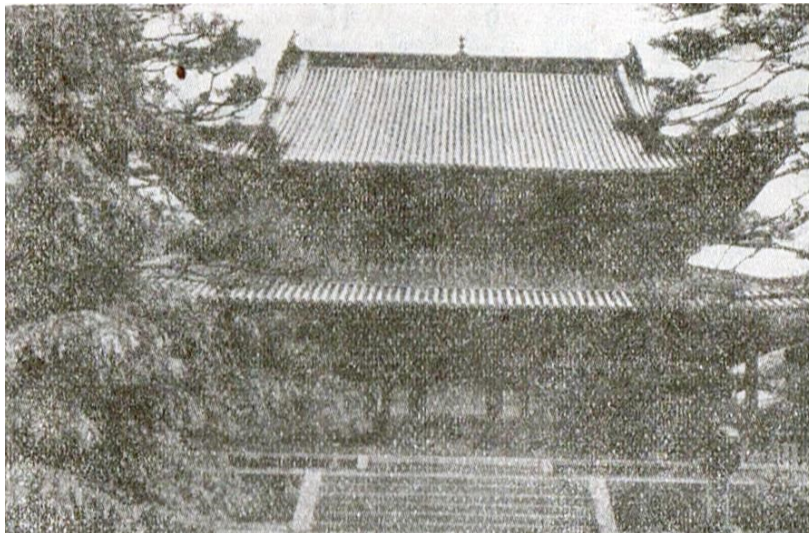
天海と崇伝

初め徳川家康はキリスト教を禁じて仏教を保護し、寺院にはそれぞれ寺領を与え、また各宗寺々への法度を定めて、厳重にこれを取り締まった。そのころ天台宗には天海、臨済宗には崇伝の傑僧が出て、共に家康に重く用いられて政治の顧問となり、大いに仏教の氣勢をあげた。天海は江戸の上野に東叡山寛永寺を開き、崇伝は芝の山内に金地院を開いた。崇伝はまた、かの有名な紫衣事件の摘発者としても知られている。



僧 天海

ところが、家光の代に至り、キリスト教を撲滅する手段の一つとして、全国民にことごとく仏教を奉じさせたので、仏教はさながら国教のようになり、もはや僧徒は苦しんで布教などをする必要がなくなったので、これから一般に安逸を貪り、しだいに墮落して行って、また名僧を出さなくなった。



宇治

黄檗山 満福寺の大雄宝殿



僧 隠元

隠元と黄檗宗

ただ将軍家綱の時に、明の僧隠元が帰化して、禅宗の1派である黄檗宗を伝え、山城の宇治に黄檗山万福寺を開いた。その学徳が頗る高くすぐれていたもので、後水尾法皇を始め、諸大名以下、多くの者の皈依尊信を得たのが独り際立っているだけです。

幕府の学校

学問の復興に就いては、元禄時代までのことは、既に述べておきましたが、その後、漢学は将軍家斉

第 17 話 江戸時代の文化

ゆしま せいどう じゅんぜん
の時に、湯島の聖堂を純然たる幕府の学校として、昌平坂学問所（通称は昌平校）と改めてか
ら、ここを中心として再びまた振るいました。この時、しばのりつざん びどうにしゅう こがせいり かんせい
の三博士を教授に任じたことは既に前に述べました。

諸藩の学校と教育の普及

しょうはん がっこう きょういく ふきゅう
幕府が学問を奨励して昌平校を開いたのに対して、諸藩もまた藩士教育のために頻りに学校を設
けた。中でも最も世にあらわれたのは水戸のこうどうかん はぎ めいりんかん めいりんどう じしゅうかん よねざわ
の興讓館、岡山のしずたにがっこう ぞうしかん あいづ にっしんかん ようけんどう
の中井竹山を始め、各地の儒者はおのおの家塾を開いて、好學の徒に教授し、又、全国の各町村には
てらこや 寺子屋があって、一般国民の子弟に読み、書き、そろばん、即ち読書、習字、算術の初歩を授けたので、
教育は割合によく普及したのです。

しかし、江戸時代の学問として、その興隆に最も重大な意義のあるのは、こくがく ようがく
国学と洋学とです。

国学の勃興

ぼっこう
国学の勃興は、ぼっこう 漢学よりはやや遅れて、つなよし 五代將軍綱吉の頃に、大阪に出た けいちゅう
に国語、国文の研究に心をひそめたのから始まった。彼は水戸のこうくわん の請いに応じて、まんようしゅう ちゅうしゃく
『万葉集代匠記』を著したので殊に聞こえています。この けいちゅう より少し遅れて、八代將軍吉宗の頃
か だあづままる 荷田春満が生まれました。京都のふしみいなり しかん 祠官でしたが、大いに国史、古典の研究に力を注いで、多く
の門人に教授した。その門人の中で最も有名なのがかままぶち
加茂真淵です。

加茂真淵

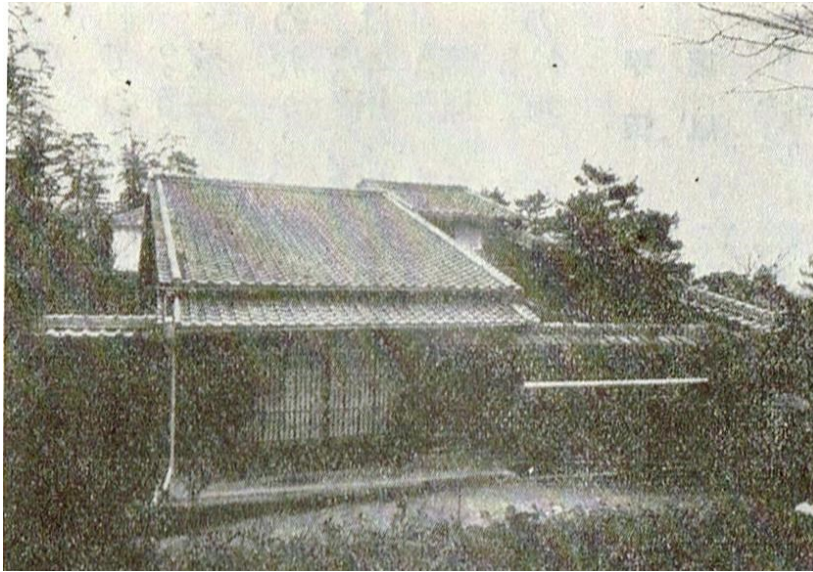
まぶち とおとうみの はままつざい かんぬし
真淵は遠江国浜松在の神主の家に生まれました。37 才の時に京都にのぼってあづままる
42 才の時に、江戸に出て盛んにふっこがく とな 復古学を唱え、特に万葉集の研究に力をつくした。50 才の時に將軍吉宗
の子のたやすむねたけ つか 田安宗武に仕えたが、64 才の時に田安家を辞し、はまちよう 日本橋の浜町に住んで、国学の教授と著述と
に就事した。その家を号していへ ごう あがたい 縣居といった。常に儒者らが中国をとうと 尊んでわが国をいやく 卑しむのをこうげき
攻撃して、大いに我がこくたい そんげん と 国体の尊嚴を説いた。その門人はすこぶ 頗る多かつたが、中でも殊にすぐれたのはもとおりりなが
本居宣長です。

本居宣長

のりなが まつざか
宣長は伊勢の松坂の人です。23 才の時に京都にのぼって、じゅがく いじゅつ 儒学と医術を学び、28 才の時に松坂
に帰って医を業としたが、い ぎょう 帰郷の前年、ききょう ふと 契沖の著した書物を見て初めて国学にこころざし 志し、翌年、眞
淵の著書を見て、ますますそのこころざし 志を固くした。32 才の時に、たまたままぶち
を旅行して江戸に帰る途中で松坂に泊まったのを、宣長はその宿に訪ねて弟子となった。ほうれき 宝暦 11 年（十
代將軍家治の時）のことで、この時、まぶち 眞淵は 65 才でした。その後、のりなが つね ぶんつう
宣長は常に文通によって教えを受け

第17話 江戸時代の文化

ながら、^{ねっしん}熱心に研究を進めていたが、^{はくらんきょうき}博覧強記で且つ至って^{こんき}根気のよい人でしたので、8年の後に^{まぶち ぼつ}眞淵が没した時には、すでに何人も^{なんびと のりなが}宣長の右に出づることはできないほどの大学者となっていました。



鈴の屋

伊勢の松坂公園内に保存されている。右手の二階が四畳半の書齋で、今も鈴が床の間にかかっている。



もとおりのりなが
本居宣長

古事記伝

^{のりなが}宣長もまた師の^{し まぶち}眞淵と同じく、其の頃の儒者らが、^{かえ}ややもすれば中国を尊んで、却ってわが国を卑しむ風があるのを大いに慨いていたが、ついに^{あまた}数多の書物を著して、わが国体の万国にすぐれている所以を^{あき}明らかにするのにつとめた。中でも彼が最も心血を注いだのは『古事記伝』です。昔、奈良時代の元明^{みよ}天皇の御代（西暦712年）に、わが国で初めて書物として編纂された最も古い歴史の『古事記』をくわしく説明したものです。

すべてで48巻の大部で、これを完成するのに彼は35才の時から69才の時まで、実に35年の長い年月を要したのです。その間、^{のりなが}宣長は四畳半の書齋に閉ぢこもって、昼も夜も筆をおかず、倦いた時には部屋の隅にかけてある鈴を鳴らして自ら心を慰め且つ励ました。それでその部屋を鈴の屋と呼んでいた。

^{のりなが}宣長はまた^{すこぶ}頗る桜の花を愛して、^{かつ みづか えが}嘗て自ら画いた自分の像に、

^{しきしま やまとごころ ひと わ}敷島の大和心を人とはば ^{お やまぎくらばな}朝日ににほう山桜花

と題した。この歌はよく我が日本^{やまとだましい}魂を詠みあらわしたものとして、今も世にもてはやされています。

^{のりなが}宣長は多くの書物を著した上に、日本全国にわたって500人近い弟子をもっていたので、彼の^{こころざし}志を継いで盛んにその説を唱える者が多かった。中でも殊に名高いのは^{ひらたあつたね}平田篤胤です。

平田篤胤

^{あつたね あきた}篤胤は秋田の人で、20才の時に江戸に出て大いに^{くがく}苦学した後、26才の時に伊勢の松坂に行つて^{のりなが}宣長

の門に入った。ところがやっと 2 ヶ月 経ったばかりで、親しく宣長の教えを受けることも出来ないいう
 ちに宣長が没したので、空しく江戸に帰った。しかしその後も固く宣長を先師と尊んで、その著書に
 よって国学に励んだ。彼は儒教や仏教をしりぞけ、神道を唱えて、さかんに尊王愛国の精神を鼓舞した。
 宣長が学問として説いたところを、篤胤は実際にも行おうとしたのです。そのために、幕府の忌むと
 ころとなって、66 才の時には秋田に帰らされたが、それより 2 年の後、68 才で没した。

世に 荷田春満、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤 の四人を国学の 4 大人と称しています。

ふみわけよ 倭にあらぬ唐鳥の	あと みるのみ人の道かは	か だ あづままる
みたまわれ生けるかひありて刺竹の	きみ こと きょう 君がみ言を今日きけるかも	か も まぶち
さしいづるこの日の本のひかりより	こま はる 高麗もろこしも春をしるらん	もとおりのりなが
人はよしからにつくとも我が杖は	やまと しまね たてんとぞ思ふ	ひらたあつたね

塙保己一

又、宣長と同時代に、同じく真淵の弟子に塙保己一がいた。武蔵の人で盲人でしたが、頗る記憶
 がよかったので、常に人に書物を読ませて、ついに広く古今の典籍に通じた。幕府の保護を受けて和学
 講談所を江戸の麴町に設けて、子弟に国書を教授しながら、未だ多くは刊行されない国書を広く集めて
 出版した。『群書類従』636 冊と『続群書類従』1,187 冊とが即ちこれで、わが国の古今の書籍を
 神祇、帝王、和歌、紀行、遊戯などの 25 部門に分けて集めた叢書です。それで、これより国学研究
 の便も大いに開けることになりました。

2 代表歌人

真淵はまた、後に家齊の時に出了た香川景樹と共に、江戸時代を通じての 2 大歌人といわれている。
 多く万葉集の古体を読んだ。それで、その方の弟子も頗る多かったが、中でも加藤千蔭、村田春海ら
 の名匠はその名を挙げておくべきでしょう。いづれも国文和歌に長じて、おのおの一家の見地を開い
 た。千蔭はまた書にも巧みで、千蔭流を起こしたのでも聞こえている。
 香川景樹は鳥取の人です。壮年の頃に京都に出て徳大寺家に仕えた。古今風の和歌を詠んで、桂
 園派を創めた。また書にも巧みでした。次にその作の 1, 2 をあげておく。

夜半の風麦の穂立ちにおとづれて	ほたると の 蛍飛ぶべく野はなりにけり
夏の夜の月の影なる桐の葉を	お 落ちたるのかと思ひけるかな

俳句と狂句および川柳

俳句は元禄のころの芭蕉の没後、しだいに墮落して来たが、天明の頃に谷口蕪村が京都に居て一派
 を開き、新しい風格をもって旧書を一洗した。又、蕪村に少し遅れて、文化文政の頃に出た信濃の小林

第17話 江戸時代の文化

いっさ ひょういつしゃだつ きょうか おおたしよくさんじん いしかわまさもち やどやのめしもり きょうか どうまがお
一茶は、飄逸洒脱をもって聞こえた。狂歌は、大田蜀山人、石川雅威(宿屋飯盛)、狂歌堂真顔
こと なだか せんりゆう あら からい せんりゆう そうし
らが殊に名高く、川柳は、新たに柄井川柳らによって創始された。

小説

しょうせつ
小説は、文化文政時代に最も盛んで、頗る燦爛たる光彩を放った。中でも、歴史物のいわゆる読本
さんとうきょうでん きょくていばきん こと きょうでん わかしがたりいなづまひょうし ばきん なんそうさと
作者としては、山東京伝、曲亭馬琴が殊に名高く、京伝には『昔語稲妻表紙』、馬琴には『南総里
みはっけんでん ちんせつゆみはりづき けっさく ひろ
見八犬伝』『椿説弓張月』などの傑作があって、広く世に行われた。

こっけい めいわ ひらがげんない ふうらいさんじん
又、滑稽小説は、明和の頃の平賀源内(風来山人)に始
まっただが、このころ式亭三馬と十返舎一九とが出て、大いに
しきていさんば じっぺんしゃいっく
ひにく かいぎやく さんば うきよぶる
皮肉と諧謔とで世間を笑わせた。三馬には『浮世風呂』
うきよどこ いっく とうかいどうちゅうひざくりげ
『浮世床』、一九には、『東海道中膝栗毛』の名作がある。又、
やなぎていたねひこ にせむらさきいなかげんじ ためながしゅんすい ぶんこ
柳亭種彦の『偽紫田舎源氏』や為永春水の『いろは文庫』
などはいづれも人情小説の代表として知られている。

洋学の発達

ようがく はったつ
さて、次には洋学の発達です。

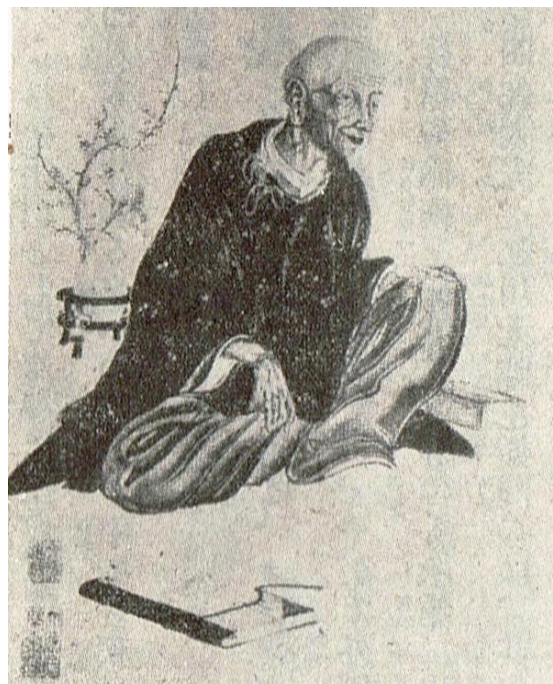
いねみつ とぎ せいよう じじょう ほんどん いえのぶ
これより先、家光が国を鎖してから西洋の事情は殆どわが国には知られなかったが、将軍家宣の時
あらいはくせき らいちよう てんもん ちりかた せいようきぶん あら
に、新井白石が、たまたま来朝したイタリー人と天文や地理を語って『西洋紀聞』を著わし、後また、
つ せいかいかつこく じじょう たづ さいらんいげん ありさま つた
オランダ人に就いて世界各国の事情を尋ね、『采覧異言』を著わしたので、いくらか海外の有様が伝えら
れた。 ついで将軍吉宗が洋書の禁をゆるめ、青木文蔵(昆陽)を長崎にやっ、オランダ語を学ばせ
よしむね ようしょ きん あおきぶんぞう こんよう まな
たので、これより洋学を修めるものが次第に現れた。

前野良沢と杉田玄白

いへはる まえのりょうたく
中でも最も有名なのは、将軍家治の時に出了た前野良沢と
すぎたげんぱく とも いしゃ じん
杉田玄白とです。2人は共に医者でしたが、オランダ文の
たいかいぼうしょ きょうどう ほんやく こころざ こっくべんれい
体解剖書を得てから共同でこの翻訳を志して、刻苦勉強、
わづ つい ようや
一日に僅かに一語を解することもあれば、数日を費やして漸
く一句を訳すこともあるというような努力を重ね、約4年を
へ ようや ぎょう お かいたいしんしょ
経て漸くその業を卒えた。『解体新書』と名づけて第118
ごももぞの あんえい しゅつばん すなわ
代後桃園天皇の安永3年に出版したのが即ちこれで、実に
ようしょほんやく はじ りょうたく ようがく
鎖国以来、洋書翻訳の始めです。しかも、良沢は洋学
けんきゅう こころざし お ちくぜん だざいふ もう
研究の志を起こした時に、筑前の大宰府神社に詣でて、
らんがく けんきゅう けつ めいよ りえき
自分は蘭学を研究しても、決して名誉や利益のためにはしな
せいつう てんまんぐう いの
いから、精通することの出来るように、と天満宮に祈って
たので、この書を出版するに当たっても、自分の名を載せることはしなかったと言われる。彼の蘭学



きょくていばきん
曲亭馬琴



すぎたげんぱく
杉田玄白

第 17 話 江戸時代の文化

けんきゅう しんけん わ
研究が、いかに真剣であったかも分かる話です。

おおつきげんたく
大槻玄沢

この 2 人に師事した多くの人々の中で、最も名高いのが大槻玄沢です。仙台の藩医で、また磐水もいった。彼は特にオランダ語の語法を研究し、『蘭学階梯』という書物をあらわして出版した。この書は、いわば蘭語独案内ともいうべきもので、オランダ語の綴り方や、発音、文法、会話などを誰にも解るように示していたので、これを手引きとして洋学を志す者がこれからますます殖えた。

げんたく すご いなむらさんぼく わげ らんわ じしよ へんきん
玄沢の門人もまた頗る多かったが、中でも稲村三伯は『ハルマ和解』という蘭和辞書を初めて編纂したので有名です。

こうして医学をもって始まった洋学は、オランダ語の研究が便利になるに従い、次第に理学、博物学などにも及んで行ったが、やがて外国船の来航と共に海防の論が盛んになるにつれて、兵学や砲術も研究するものも次第に出て来た。宇田川玄随、渡邊華山、高野長英、高島四郎太夫、江川太郎左衛門らは、その後の洋学者として特に知られている人々です。

びじゅつ こうげい
美術および工芸

つぎ ちゅうこう びじゅつこうげい いちべつ
次には、幕府中興以後の美術工芸を一瞥しておきます。

これより先きに、岩佐又兵衛によって創められ、菱川師宣によって元禄の絢爛な風俗を巧みに伝えられた浮世絵には、将軍吉宗の時に、宮川長春が出て、将軍家治、家斉の時に勝川春章、喜多川歌麿、歌川豊春、歌川豊国、葛飾北斎、安藤広重らの大家が並び出た。美人を描き、あるいは風俗、風景を写して、おのおのその得意の才を発揮した。これらの浮世絵の多くは版画となって、今も世界に広くもてはやされています。

また、中国の南宋の画風を伝えた人には、池大雅、与謝（谷口）蕪村がいて、やや遅れて渡邊華山が出た。円山応挙は写生に巧みで円山派を開き、松村呉春は更にそれから出でて別に四條派を開いた。伊藤若冲、谷文晁らもまた別に独立して一家の風格を備えていた。森狙仙は狩野派を学んだ後に、円山派および四條派の筆意を汲んで、殆ど猿ばかり描いていたので聞こえ、司馬江漢は長崎のオランダ人に画を学んで、刻苦して西洋画の一派を創めたので聞こえています。

しょうどう しょうれんいんりゅう おいりゅう かも まぶち かとうちかげ むらたはる
書道では、青蓮院流から出た御家流が武家の間に行われたが、別に加茂真淵、加藤千蔭、村田春海らは上代様を学んで美しい書風を始め、細井広沢は明・清の書風から出て一家を成し、貫名海屋、市川米庵らは名高い唐様の書家でした。

おりもの にしじん いえなり こうづけ きりゅう いせぎき むさし ちちぶ
織物は、京都の西陣に大いに発達したが、後、家斉の頃に上野の桐生、伊勢崎、武蔵の秩父などにも絹布の製織が盛んになって、ややもすれば関東の機業が西陣を圧倒するようになった。

ちようこく のうがく のうめん めいさく どうじき せんちやき こと
彫刻には、能楽が盛んに行われるにつれて、能面の名作が出て、陶磁器には、煎茶器が殊に行われました。

(第 17 話 江戸時代の文化 終わり。 次は前頁に戻り、第 18 話 尊王論の勃興)